

## 石狩川治水の歩み



砂川のアバ

木材の流送にも使われました。筏を組んで流水して来た木材を網場に溜め、引き揚げ工場で製材され開拓者に供給されました。

石狩川の治水は、明治43年の第一期拓殖計画に始まります。良く知られているように、岡崎文吉博士という日本の代表的河川技術者を開祖としています。しかし、岡崎博士が計画を立案できたのも、10年以上も前からの水位流量記録があつたからです。

外国人石狩川河口改良水理工師長ファンゲ

川は文明の母であると言つたのは、札幌農学校出身の日本近代地理学の創始者・志賀重昂です。まさにその言葉通り、石狩川も流域の開発に大きな役割を果たしています。時代にあつては、石狩川が移民にとつて欠かすことのできない「道」でした。帆船や外輪船などが人や物を運ぶ足となつて航行し、開拓に貢献します。

しかし川は恩恵だけでなく、時には荒れ狂う洪水によって人命はもとより住居、耕地などに大きな被害を与えてきました。こうした洪水を防ぐために行われてきたのが「治水工事」です。

農業用水としての利用や、水力発電も忘れてはなりません。今日でも石狩川には数多くの多目的ダムを建設していますが、いずれもわれわれの生活に欠かすことのできない水道用水や発電、あるいは洪水調節として大きな恩恵を与えてくれています。このように川は文明の母として、人々の生活と密接に関わつきました。

川は文明の母であると言つたのは、札幌農学校出身の日本近代地理学の創始者・志賀重昂です。まさにその言葉通り、石狩川も流域の開発に大きな役割を果たしています。時代にあつては、石狩川が移民にとつて欠かすことのできない「道」でした。帆船や外輪船などが人や物を運ぶ足となつて航行し、開拓に貢献します。

今日、北海道立文書館に当時の福士成豊の復命書が残されており、詳細にその経過を知ることができます。それによりますと、明治13年から石狩・茨戸・対雁・幌向太の4か所の観測所で観測がおこなわれています。その復命書の一節に、「漸く諸事整頓に付、本月一日午後帰札直ちに水理工師ファンゲント氏に面接し、前件水標設置の場所及測者の所業に至るまで、るる陳述せしに幸い異存も之れ無く、然るに同氏不日船便を得ば病氣保養のため出京せんと。(明治十三年十一月十五日復命書)」とあり、観測開始を報告しています。



滝里ダム



定山渓ダム

流送は鉄道が普及してからは、橋梁など河川工作物に障害を与えるところから禁止されるようになりました。

ントの献策に基づき、福士成豊が実施に当たったものです。

今日、北海道立文書館に当時の福士成豊の復命書が残されており、詳細にその経過を知ることができます。それによりますと、明治13年から石狩・茨戸・対雁・幌向太の4か所の観測所で観測がおこなわれています。その復命書の一節に、「漸く諸事整頓に付、本月一日午後帰札直ちに水理工師ファンゲント氏に面接し、前件水標設置の場所及測者の所業に至るまで、るる陳述せしに幸い異存も之れ無く、然るに同氏不日船便を得ば病氣保養のため出京せんと。(明治十三年十一月十五日復命書)」とあり、観測開始を報告しています。

流送は鉄道が普及してからは、橋梁など河川工作物に障害を与えるところから禁止されるようになりました。

ントの献策に基づき、福士成豊が実施に当たったものです。

## ●全流域● 治水

福士成豊はブラキストンに測量学を学び、外国語に堪能であったことから、万事ファンゲントと円滑な意思疎通があったことが文中から窺われます。これによつて文明開化の時代、西欧技術導入の一場面を知ることができます。

福士成豊は明治16年の春、石狩川の融雪出水状況調査を命ぜられていますが、その復命書の一節に、「厚別野津幌の両川の如きは川辺の柳木、水に現るを以て河脈の如何を知るまでにて、一円の湖水なり」と報告しています。また、「排水の設けなき間は植民の地にあらず」と石狩川治水の必要性を随所に訴えています。

このような原始河川の改修に挑んだのが、岡崎文吉博士で博士はまず、石狩川の洪水量を算出しておりますが、その手法は広い意味で今日の貯留閑数法に属していると考えられる優れたものでした。また下流部のショートカットから着手する改修計画を立案しました。このショートカットは本州河川では既に大半が江戸時代に終わつていてそのころは「たがへ」と呼んでいました。たとえば利根川などは、もとは東京湾に注いでいたのを

現在の河道に、いわゆる東遷工事が30年にわたり進められ、完成したのが承応3年(1654)のことです。このようにショートカットは古くから行なわれています。洋の東西を問わずショートカットは土地利用のための河道の整形手術であつて、これなくしては沖積地の治水工事はありません。

北海道は河川に限らず、未開の原野のまま放置されていましたので、明治政府は全額

国庫負担によつて公共投資を行つきました。とはいゝ日本財政規模が小さかつたため、石狩川治水の予算も充分とはいへず、乏しい予算を有効に使うため河川計画上いろいろな工夫がなされました。築堤を計画高以下に抑え暫定築堤として、無提地区の解消を旗印に涙ぐましい努力が払われた時代もありました。

石狩川治水事業は天文学的工事量であり、機械施工でなければ到底達成が不可能でした。例えば水中掘削には当時日本で最大能力を誇った「浚渫船」昭和号、北海号が使われました。これらが使われた生振のショートカット現場は、昼夜を問わず工事が進められ、まるで不夜城のようだつたといいます。



豊平川鴨々水門竣功式 明治17年

石狩川の治水技術開発の歴史はショートカットによる河床安定対策工に始まり、夕張川治水工事の経験にもとづき、戦前に模型実験技術が開発され、戦後に豊平川床止計画として開花しました。中下流部地帯の泥炭地軟弱地盤築堤工事には、石狩川独自の新工法の開発、岡崎ブロック発祥の地である石狩川において、新製品施工技術の開発などがなされました。

特に近年は、従来の治水機能に加えて、多自然型川づくりとして環境にやさしい様々な護岸工法が試みられています。

## 岡崎文吉の自然主義工法

岡崎文吉は、石狩川治水の草創期に活躍し、治水計画の基礎を築いた人物です。

岡崎は、15歳で札幌農学校工学科の第1期生として入学、卒業後同校に研究生として残り、明治24年に21歳で助教授となりました。その後北海道庁に技師として奉職しました。岡崎の最初の仕事は明治27年のことで、石狩川下流域の大規模排水事業でした。これは、幌向原野排水運河と馬追原野排水運河を着工させ、湿地帯の原野を排水によって移住可能な土地、農耕に適した土地に変えるというものでした。

次いで28年、札幌から茨戸（花畔）、茨戸から銭函までの排水運河工事です。札幌から茨戸までの運河は現在、創成川として残っています。運河の両岸の土地は砂質なので掘削のときは土が崩れやすく、風が強いと砂質の土を飛ばして運河の底に埋没する。これを防ぐには運河沿いに防風林が必要だと岡崎は説いていますが、実行されたようですがなく、その言葉通り運河は埋没しています。

岡崎は、治水にあたって森林の役割を重要

視していました。運河を設計するときも、石狩川が氾濫した場合、防風林があることでは堤防の決壊を防ぐことができると、その効用を設計に取り入れました。

また、岡崎文吉の名が一躍知られるようになったのは、豊平川に架かる初代の鉄橋、豊平橋の設計です。鉄橋といつても全部ではなく全長63mのうち鉄は中心部の36mだけで鉄と木の混合でした。それまで外国人が設計してきた木製の橋は洪水のたびに流される繰り返しでした。明治8年にホルト、明治

明治31年の大水害を契機に翌年、道庁内に「北海道治水調査会」が設置され、石狩川を中心とした治水調査が始まりました。その調査員の中心が岡崎でした。

明治35年には石狩川の治水計画に役立てるため、欧米の視察に旅立ちます。主要な目的は、北米のミシシッピー川をはじめ、ドイツのライン河など欧米各地の河川計画や工事例を収集して石狩川の治水計画に役立てることでした。



岡崎文吉設計の豊平橋

11年にホイラーが設計し架けられましたが洪水で流失しました。明治31年に岡崎が設計した待望の鉄の橋が完成しました。その年の大水害にも持ちこたえましたが、明治43年の大洪水で流失しました。その後、仮橋の時代が続くことになります。

明治31年の大水害を契機に翌年、道庁内に「北海道治水調査会」が設置され、石狩川を中心とした治水調査が始まりました。その調査員の中心が岡崎でした。

明治35年には石狩川の治水計画に役立てるため、欧米の視察に旅立ちます。主要な目的は、北米のミシシッピー川をはじめ、ドイツのライン河など欧米各地の河川計画や工事例を収集して石狩川の治水計画に役立てるため提出したのです。



岡崎式单床ブロックによる護岸施工状況(大正元年頃)

「北海道治水調査会」は、明治36年に解散しました。岡崎文吉は、調査会で集めた資料を中心に石狩川の治水計画を検討し、明治42年、「石狩川治水計画調査報文」を道庁に提出しました。

この中で岡崎は、「自然主義」を唱えていました。蛇行した川の流れはそのまま残して、決壊しやすい護岸を補強し、放水路(バイパス)で洪水時の増水を流す方法です。水害が常にある市街地には部分的に堤防を築く必要があることを主張し、また森林の大切さにも言及しています。この時に算出された洪水量は、その後70年間にわたり石狩川治水事業の指標となつたのです。

翌年43年に道庁は、「北海道第1期拓殖計画」を策定、治水事業もその一環として予算計上され北海道の本格的な治水事業がスタートしたのです。

大正4年、岡崎の治水思想が詰め込まれた「治水」を出版。「賢明な方法は、可能な限り自然を保全し、これに対し合理的でかつ実際的な工事を施し自然を補助することであり、自然を保護し、またこれに準拠するの外、自然の背反する事業は、決してこれを施行しないことである」。これを自ら自然主義と名付けたのでした。

また、岡崎が開発した「コンクリート単床ブロック(ヨーカンブロック)」による護岸工法は、大正・昭和期を通じて日本国内で普及しました。たばかりではなく、アメリカのミシシッピー河では今でも使われています。

明治43年、石狩川治水事務所長に就任した岡崎は、石狩川の治水工事を、当初は持論である放水路方式で行う予定でした。ところが大正6年、「石狩川治水事業施工報文」において、蛇行部をショートカットする捷水路(しょうすいろ)方式に変更したのです。この間の詳しい事情は不明ですが、当時主力だった、捷水路派との論争があつたともいわれています。

生振・対雁間捷水路工事が始まった大正7年、岡崎は内務省に転勤となり、同9年には中国へ赴任して、その後、二度と石狩川の治水に関わることはありませんでした。昭和20年、茅ヶ崎で逝去、73歳でした。

この間、日本の治水工事のほとんどが捷水路方式で行われ、川の流下能力を高めて水害を減らし、水位を低下させ湿地の開発を進めたという功績は大きかったのですが、いま環境問題が問われるなか、自然のあるがままの流れをそのままに、決壊する部分を補強していく、岡崎が理想とした「自然主義の治水」を再評価するようになりました。

# 石狩川生振捷水路

おや ふる しょう すい ろ



生振捷水路(日本海から南東、札幌市街を望む)

ました。土木遺産は江戸時代末期から1945年までに建設された土木構造物を対象に、土木学会が2000年より文化価値を評価して認定しており、全国で35箇所が認定されています。道内では旭川市の「旭橋」と石狩市の「石狩川 生振捷水路」の2箇所が最初に認定されました。

北海道の大河・石狩川の語源「イ・シカラ・ペツ」は、アイヌ語で「非常に曲がりくねった川」の意とも言われています。北海道の開拓は明治2年に北海道を計画的に開拓する組織として、開拓使の設置に始まりますが、大蛇行を繰り返す石狩川の治水の歴史は、北海道開拓の歴史そのものでした。

明治31年には被害家屋18,600戸、死者112人の洪水被害が生じ、多くの入植者が撤退を余儀なくされました。石狩川

の治水事業の始まりも他河川と同様に大水害が契機となります。明治32年には北海道治水調査会が設けられ、明治42年に初代石狩川治水事務所長・岡崎文吉により「石狩川治水調査報文」がまとめられ、本格的な治水事業が始まりました。最初の捷水路事業は大正7年に開始され、その後、昭和44年

に石狩川本川最後の捷水路事業である砂川捷水路が完成するまで、約半世紀もの間継続されました。石狩川本川における捷水路事業は全29箇所にのぼります。

石狩川捷水路事業で最下流に位置する生振捷水路は延長3,655m、堤防間隔910m、平均切深12m、河床勾配1/6,000の規模で施工され、石狩川は約14.6km短縮されました。全29箇所の捷水路工事では河川の長さが約58.1km短縮され、生振捷水路はその内の約25%に当たり、他の捷水路に比べ大規模であつたことが窺えます。捷水路全体での効果としては、昭和30年頃より年平均水位は顯著に低下し、昭和62年には砂川地点(河口より86.2km)で約3.5m、石狩大橋地点(河口より28.6km)で約1.5mの低下が見られます。

この河川水位の低下は、上流に広がる石狩平野の洪水被害を激減させ、広大な湿地帯の乾燥化を促進しました。その結果、約3,000haの耕作地が生まれ、わが国の大穀倉地帯を形成するための礎となりました。

●下流域● 治水

「石狩川の生振捷水路」が2002年度の土木学会選奨の「土木遺産」に認定され、11月18日の「土木の日」に認定書が授与され

# 石狩川流域の開発と囚徒の足跡

●全流域● 治水  
と石狩川の上流は奥蝦夷地と呼ばれ、神秘のベールに包まれていました。その水源とみられる地域は、アイヌ語で忠別太（現在の旭川）と呼ばれ、キラキラと波立つ太陽の川がある所という意味でした。重罪囚によつて北海道を開拓しようとした明治新政府は、このような水の恵み溢れる大地を開拓と植民の夢を託していました。

明治時代からの石狩川流域の開発には囚徒が多大な貢献をしていますが、明治19年に今国道12号線の基礎となる上川仮道路や、明治22年に旭川から北見、網走への道路を開削したことが良く知られています。しかし囚徒による開発は道路にとどまらず多くの記録が残っています。

明治23年には永山の屯田兵村の建築工事200戸分を樺戸と空知の両集治監が担当しました。囚徒が当麻で伐採した用材は牛朱別川に流送して、河畔で製材しましたが、残りの部分は民間が請け負い雨粉の山から伐採して美瑛川を流送しました。また一部

の資材は、小樽から汽車で江別へ運び、江別から船で滝川へ、滝川からは馬そりで永山まで運びました。

囚徒の貢献は戦前の鉄道敷設や河川工事にも及んでいます。昭和8年には網走刑務所の受刑者が刑務所敷地内を通る東湧線の工事に関わり、翌年には常呂町に泊まり込み昭和11年まで作業を続けています。

昭和9年には旭川刑務所の囚徒が石狩川波防工事や東旭川の道路工事などに関わっています。さらに民間業者の下請けとして、

天塩川切替工事に受刑者70名を1日70銭で泊まり込み作業に従事させたり、道庁直轄の工事である忠別川の改修工事に1日80銭で従事させています。当時の一般労務者は最低1日1円という時代でした。昭和10年には名寄に近い剣淵町の剣淵川築堤工事に従事し、昭和12年からは鷹栖町のオサラッペ川改修工事にも従事しています。

終戦後は荒廃した戦後の労働力を補う好都合な拠点として、内地の選抜模範受刑者を旭川刑務所主管に受け入れており、その後、昭和23年の近文築堤名譽班による石狩川の水害復旧仮堤防工事をはじめとして、

昭和25年までに工事や補修などに多くの従事記録が残されています。

北海道の囚徒の外役は、明治期の殺伐で暗い北海道のイメージを払拭しました。さらには、青空行刑と呼ばれた受刑者の使役を成功させました。そして、その中で触れ合った方々との信頼感を醸成し、刑の執行に温かさと社会との接点を作り、有意義な更正の場を生み出しています。



昭和22年の牛朱別川の水害

# 川と水と共に

## ●新篠津村● 治水

新篠津村の開拓は、明治16年に月形村樺戸集治監看守長、熊田直行によって、現在の岩見沢大橋の上流にあたる49線北3号付近に初めて開墾の鉄が入れられたことによります。

当時の新篠津村は、篠津原野植民区画の一部にあって、大正4年、二級町村製が施行するとともに、昭和5年に北村地区から袋達布が編入されました。村の初期のあゆみは決して平坦ではなく、毎年のように襲つてくる水害等で開拓者たちの苦労がたえず、離農と入植が昭和20年ごろまで繰り返されました。

その後、石狩川の治水事業が進み、篠津地域泥炭地開発事業である篠津運河工事が始まり造田事業が進む中、人口は徐々に増加し、産業は活発化していきました。

現在、新篠津村は農業を基幹としながら、田園福祉とコミュニティの思想のもと、特別養護老人ホーム、ディサービスセンター、知的障害者生活施設と授産施設、更に高等養護学校などを誘致し、これら公共施設などや環

境を生かしたエリアの整備も進み、平成21年現在で人口が3,659人で、全道15村の中で一番人口の多い村です。

かつての石狩川は、新篠津村の大地を大きく蛇行して流れています。いま内陸湖になつてゐる篠津湖は、昔の石狩川の流水そのものであるといえます。石狩川は母なる川でもあります。方では、荒ぶる川でもありました。

開村した明治29年に、篠津川が氾濫し、大きな被害を受け、その2年後の明治31年にも石狩川が氾濫し、歴史に残る記録的な大災害をもたらしました。この年は、春と秋の2回大洪水に見舞われています。この洪水が石狩川との長く辛抱強い闘いの幕開けとなりました。

北海道庁は、北海道治水調査会を発足させ、明治32年から、11年間現地調査を行い、その結果をまとめ、明治43年に石狩川第一期治水工事をスタートさせました。しかし大正8年、異常暖気による雪解け水で石狩川が氾濫して、家屋や田畠が浸水し、農作物も大被害を受けたのです。

また、昭和7年にも第一期治水工事も終わりに近づいたころ、石狩川の氾濫により大

水害に見舞われ、この被害により辛苦の結晶ともいべき農作物は全く収穫ができず、住民は、食糧難のため道庁から救助米の配布を受けたこともありました。

毎年のように襲う大洪水と闘い、なかには農業への愛着心は持ちながらも営農が根底から崩されるような災害のために転出する人々も多かつたようです。



対岸の岩見沢の浸水（明治31年）

# 自然災害と治水事業

昭和30年8月の水害により、濁流にのみこまれた北竜町の各地で被害が発生しました。床上・床下浸水家屋608戸、田畠の冠水面積838haという被害を受け、これを

機に災害対策委員会を組織して、道庁や開発庁に運動を展開しました。主な内容は、鷹泊ダムの計画放水の要請、対岸の妹背牛町に対しても私設堤防の撤去、抜本的な治水対策などです。鷹泊ダムは、その水害時にダム自体の決壊を防ぐ唯一の方法として、やむをえずとつた豪雨直後の大量放水の処置が、下流域の被害を大きくしたことは周知の事実でした。

翌年、災害対策委員会が对外折渉を続けているうちに、北海道総合開発の一環として、国費による雨竜川全体の治水計画が出されました。その計画は実際に膨大なもので、雨竜川の屈曲部を直線化して、その両側に堤防を築くというものでした。これが完成すれば、どのような豪雨に見舞われても氾濫のおそれは少なくなるはずです。

この事態に対応するため地元の協力を必

要とする事項も多く、「雨竜川治水促進期成会」を組織しました。円滑な事業推進のために、住民と当局の間に入り、いろいろな役割を果たしていくための機関でした。

昭和35年から始められた、北海道総合開発計画に基づくこの工事は、昭和40年まで続けられました。築堤や新水路開削、水路の付け替え工事などがおこなわれました。雨竜川の支流、恵岱別川の上流の勾配はかなり急で、その地域一帯が多雪地帯のため春の融雪期には氾濫しやすい状態でした。このあたりは御料林で大正の中頃から造材が盛んでしたが、戦時中は特に極端な伐採が行われたために、森の保水力が弱まり氾濫の恐れがさらに大きくなっていました。

そして昭和36年5月、恐れていた最大級の融雪洪水が起きてしまいました。堤防を含む河岸22カ所が決壊、床上床下浸水の家屋が14戸、道路決壊が1カ所、橋梁流出が1カ所、水田の冠水90ha、畠の冠水10haという甚大な被害でした。

この水害によって大打撃を受けた地域農家86戸が団結して、恵岱別川治水促進期成会を組織します。熱心な運動を続けた結果、昭和38年から恵岱別川改修工事が着工されました。



昭和30年の水害（北竜付近）

## 舟橋から深川橋へ



昭和初期の深川舟橋

まだ橋がないころ、音江村と深川町の間は渡し船で往来していました。明治36年に、音江小学校の校長先生が氷橋で足をすべらせ亡くなりました。明治41年6月9日、深川

町本町の呉服屋から出火し、駅前日抜き通りの商店街40戸を焼失しました。そのとき駆けつけた対岸の音江村の住民が家を失った人々を見舞つた後、帰るために渡船に乗りました。その日は風の強い日で、船は横波を受けてあつという間に転覆して、8人が死亡します。こうした渡船の事故で、毎年何人の命が犠牲になりました。

大正6年になり、やつと「深川舟橋」ができました。舟橋とは、川幅200mの石狩川の深川側から中州までの110mに木の橋を架けて、残りの部分には、11隻の舟を横に並べて桁木を渡し、その上に幅3・6m、厚さ6cmの板を敷きつめた「橋」です。

現存する写真で見るかぎりは、そんなに舟と舟の間隔がないように見えますが、実は7mくらいとかなり広く、不安定なものでした。苦肉の策の橋ですが、渡船と違つて天候に左右されないため人気がありました。しかし、大正10年4月、雪解け水で石狩川が増水し、橋を渡つていた9人が死亡しました。

橋を望む住民は請願運動を熱心に繰り返しました。その結果、「第2期北海道拓殖計画」に「深川橋」の橋を架ける計画が決ま

つたのですが、工事の実施は不明でした。舟橋事故から9年後の昭和5年にようやく架橋工事が始まり、地域住民の夢が実現しましたが、当時の喜びは非常に大きなものでした。

昭和6年秋、渡橋式は明治天皇の誕生日の11月3日に合わせ、盛大に行われました。深川と対岸の音江から選ばれた三代の夫婦の渡り初めに始まり、深川町と音江村の全戸が日の丸の小旗を掲げ、完成した橋の付近では餅まきと芸者たちの踊りが披露されました。2千人以上の小学生児童生徒が口々にお祝いの歌を歌い、日の丸を振つての旗行列が町内のみずみまで練り歩きました。



旧深川橋 昭和20年代(『新深川市史』所収)

# 旭橋と牛朱別川

●旭川市●治水

旭川は明治23年に開村し、石狩川・牛朱別川・忠別川・美瑛川の合流点を中心発展してきました。街のシンボルとしてひとときわ目を引くのが、石狩川に架かる「旭橋」ですが、明治25年に最初に架けられた橋は、鬱蒼と繁る樹林から橋の材料を伐採してつくった木製の粗末な橋でした。長さは約90m、幅は約1・8mの橋です。この橋は重量のある馬車は通れず、石狩川を馬渡し専用の船が往復しました。

2年後の明治27年、高い手すりのついた木橋「鷹栖橋」が架設されましたが、明治31年の大水害で流失。同じ型の橋が架けられましたが、毎年のように水害に襲われ、破損を繰り返していました。

明治34年、陸軍「第七師団」が旭川に設置され、交通量が激しくなったため、今までの橋では対応できず、頑丈な橋が必要になりました。道庁の山岡技師設計のアーチ型の鉄橋が架けられることになりました。その際当時、対岸の鷹栖村近文は旭川と合併していたので、「鷹栖橋」から「旭橋」へ改

名されました。明治34年に着工し、37年に完成しました。その後、数々の水害にも耐えてきた旭橋も、25年の時が経ち、木製部分の傷みが激しく、昭和4年に改修工事が決まり、昭和7年、「二代目」旭橋が完成したのです。北海道の三大名橋「旭橋」の誕生です。(他は、「二代目豊平橋、初代幣舞橋」)

この旭橋の架橋工事と並行して、ほぼ同じ場所で牛朱別川切り替え工事が行われていました。現在のロータリー付近を流れていた牛朱別川を石狩川に合流させる大工事です。当時の牛朱別川は旭川市内で石狩川に合流しますが、市街地に入るところから蛇のようになに曲がりくねり、たびたび大雨が降ると市街地が浸水していました。そこで、牛朱別川を切り替えて市内に水が出るのを防ぐとともに、その埋め立て地を長期的都

市計画に利用するというものでした。昭和5年5月着工、7年9月に完成しました。昭和7年は、旭橋の架け替え工事の完成、牛朱別川の切り替え工事の完成、永山村の一部の編入と三つの総合祝賀会が開かれ、この日の夜は市民のお祝いの提灯行列で大変な賑わいだったそうです。



牛朱別川の切り替え工事  
昭和6年頃(『旭川市の80年の歩み』所収)



現在の旭橋 平成12年

# 大雪ダムの完成

「大雪ダム」は石狩川の上流、大雪山国立公園のなか（上川町字層雲峠）につくられた、ロックフィルダム方式の多目的ダムです。このダムの完成祝賀パーティーが、昭和50年9月に層雲峠温泉のホテルで盛大に行われました。旭川市長、上川町長など近隣市町村長、北海道開発局長や工事関係者約400人が参列する会場では、誰もが一様に「よかつた、よかつた」と胸をなでおろしました。

ダムの竣工式の10日ほど前、台風6号による降雨量が185mmという記録的なものになつてきました。石狩川下流では各地で氾濫し、大きな被害が出ていたにもかかわらず、ダム近隣の旭川市、上川町、愛別町はわずかな被害ですみました。ダム建設の効果がこんなに早く現れるとは誰もが考えてはいませんでした。

国が石狩川の上流にダムをつくる計画は戦前からありましたが、地質上の関係などで実現されずにいました。  
昭和29年、台風15号が発生し、青函連絡船「洞爺丸」が沈没、後志・岩内町の大火な

ど甚大な被害をもたらしました。その台風は、大雪山国立公園の貴重な森林をなぎ倒し、一夜にして、森林の50%が壊滅しました。

森林は自然のダムといわれるよう、保水能力にすぐれ、雨などを地中に蓄えることができます。しかし森林が破壊されたいま、土砂崩れが起き、洪水が起きてしまうのではないかと、石狩川上流の市町村は、心配しました。

このことで、ダム建設の気運が盛り上がり、昭和32年、国は「石狩川上流総合計画」の調査を開始しました。その後さまざまの調査を積み重ね、昭和43年に大雪ダムは着工が決まります。

高さ86.5m、提長440m、総貯水量6,600t、体積3,874,000m<sup>3</sup>、という巨大な人工湖「大雪湖」が、国立公園の中に出現しました。

この大雪ダムは、石狩川の洪水調整のほか、上川盆地の水田の灌漑用水、旭川市近郊の上水道の水源確保、電力の供給、さらに全国



大雪ダムの全景



ダムの完成でできた人工の湖・大雪湖

でも珍しい、  
公害防止用  
水の役目を  
担う多目的  
ダムです。

昭和49年、6年の歳月をかけた巨大ダムが完成しました。日本で初めて、基礎岩盤の浸水などを監視できる「監査廊」を設けたロ

ックフィルダムという、土や岩石を積み上げて築いていくものです。この方式は世界中で行われていて、北海道では、新冠ダムや高見ダムなどが同じものです。

## 渡部栄蔵と運河構想

明治25年国鉄室蘭線が開通すると、それまでは札幌→室蘭を結ぶ内陸交通の要衝として、人馬の通行が絶えなかつた千歳村は、人々の行き来も途絶え、村は一気に寂れていきました。



長都沼の排水路掘削

明治38年、新潟県佐渡郡から親戚を頼つて千歳村に移住した渡部栄蔵は、他の人の数倍も働き小さな雑貨店を振り出しに、林業経営にも力を注ぎ村一番の素封家といわ

れるまでになります。渡部は寂れ果てた村を豊かにしたいと願い、当時はまだ馴染みの少ない飛行機に村の未来の夢を託し、自分の所有する山林を飛行場用地として村に寄付します。大正15年、遂に村民一同の手作りの飛行場に一番機が着陸し、今日の千歳市発展の基礎を築きました。

渡部は、早くから千歳川中下流の人々が、たびたび大きな水害に見舞われていることを憂い、水害を防ぐ方法を研究し、石狩と勇払の間を運河で結び、千歳川の水を運河に落とすより無いとの結論に達します。

その結果、長都沼や馬追沼周辺の広大な湿地帯が一挙に干拓され、広大な耕地を造るとともに、太平洋と日本海を最短距離で結ぶことで船舶輸送のコストを大幅に下げ、有事の際には駆逐艦クラスの艦艇が速やかに両海の間を移動出来るようという壮大な構想を描いていました。

昭和12年、ようやく海軍航空隊の設置が決まる、直ちに長年抱いていた構想の実現に動き出します。

渡部は、この構想を実現させるためには、

なければ困難だと思い、千歳海軍航空隊の将校達を説いて軍部に働きかけるとともに、識者の教えを受けて工事の見積金額やそれによつて得る経済効果を詳細に調べ上げ、北海道庁に対しても運河の建設を働きかけます。

この運河構想は、北方の防備を検討していた軍部に取り上げられ、基礎的な測量等もされました。終戦によって軍は崩壊し、更に北海道経済の発展に役立てようとしていた北海道庁も、戦後の急速な道路網の整備と、貨物輸送の主力がトラック輸送に移ったため、いつしか運河建設の計画は立ち消えとなりました。

それでもなお、渡部は運河構想を諦めず、会う人ごとに「千歳川下流の水害を無くすには、千歳川の水を運河に落とし、太平洋に流さなければ駄目だ。今は戦争中と違ひガソリンも軽油も豊富だが、地中から掘り上げた石油は何時か不足する。そんな時少ない燃料で、大きな貨物を運べる船舶輸送が主力になる。車は海を走れないが、舟は運ぶことが出来る。」と説いていました。

# 悲願の夕張川新水路



夕張川新水路に出現した滝状の流れ

## ●夕張川流域 ● 治水

夕張川治水工事は大正11年に着工され、新水路の掘削と堤防、河床洗掘防止のための清幌床止、清幌橋や江別大橋等の架橋の大方针が決まりました。

を入れるより、直通放水路をつくった方が将来のため有利であるとの結論に至り、約40kmの旧夕張川途中から約11kmの新水路を引き、直接石狩川に切り替える、夕張川治水の大方针が決まりました。

き道庁技師が南幌町に降り立ちました。後の石狩川治水事務所第五代所長、保原元二です。

保原は民家に泊まりながら、住民から水害状況を聞き、夕張川の調査と測量にあたります。屈曲した川筋に力

も行います。保原は工事進行や中央との折衝など、明治43年から昭和11年までの27年間、半生を夕張川治水に尽しました。

明治43年、若き道庁技師が南幌町に降り立ちました。後の石狩川治水事務所第五代所長、保原元二です。

工場は南幌(清幌)、渡川(石狩川合流付近)に置かれ、百余万人の労働力が使われました。秋田、山形、岩手からの独身者が多くを占め、当時、東洋の大工事といわれた信濃川下流の大河津分水路の技術者、最新機械も導入されました。しかし一帯は泥炭地のため、難工事となりました。

清幌は飲食店や雑貨店が並ぶ小市街となり、お盆と9月には芸人を招いた慰労祭が行われました。信仰による安心感を与えるため、日高の平取神社から分霊し、「義経神社」が清幌橋に接し建立されます。

そして昭和11年、15年の歳月を費やした夕張川新水路が完成。翌年、石狩川合流点から約2,200m上流に約4m落差の「ナイヤガラの滝」状の流れが出現したため、床止の下流に第一基目の床止を施工します。

夕張川新水路の効果は大きく、流域では米の収穫量が飛躍的に増え、それに伴い入植者も増えました。長沼町では、西長沼の農家が増えたため、新しく小学校が新築され

ました(現・西長沼小学校)。

南幌町義経神社の境内には、南幌町と長沼町が相談して、昭和14年に恩人・保原元二の胸像が建てられました。

戦時の銅像供出を経て、昭和36年に胸像を再建。南幌町では毎年7月1日を「治水感謝の日」の公休とし、感謝を捧げています。

清幌橋の架け替え工事に伴い、義経神社は南幌神社に合祀され、胸像は「なんばろりバーサイド公園」に移されました。新たに治水感謝の碑も建てられ、「治水感謝式」として今も続けられています。

長沼町では、戦後最大の凶作となつた昭和29年を契機に、先人に感謝を捧げる「水祭り」が毎年7月2日に長沼神社で行われていますが、ここにも保原元二之碑を見ることがあります。治水の祭祀は、全国でも珍しいものですが、石狩川流域はこうしてつくられたことを私たちは忘れてはなりません。



リバーサイド公園の保原元二胸像

## 「バンザイ堤防」の悲劇

ひ  
げき

●長沼町・南幌町 ● 治水

夕張川は、開拓当初からひどい暴れ川でした。水源の夕張山地から、栗山、長沼を通り幌向にかかるあたりから、急に西に向きます。そして、長沼と幌向の湿地帯をくねくねと蛇のように曲がりくねつて、江別の境界で千歳川に合流します。春の雪解けのころや、秋の長雨が続くと夕張川が増水して、どんな頑丈な堤防でも決壊してしまいます。その原因は千歳川との合流に近い「木詰」という場所にありました。その名のとおり、上流から流されてきた樹木が折り重なるように積み上げられ停滞し、水が膨れあがる場所でした。

ある年の秋、雨が降り続き、たちまち水がさが増してきました。川の両岸、つまり幌向と長沼の村じゅうの人たちが総力をあげて、決壊を防ぐために競つて土嚢を積み上げました。しかし水は努力をあざ笑うかのように勢いを増していきます。このままだとどちらかの堤防が破られます。

破られた方の田畠は水に浸かり大打撃を受けますが、対岸の村は助かります。自分

たちの田畠と家を守るために必死で土嚢を積み上げます。そのとき対岸の堤防が決壊して、濁流が流れ込んでいきます。

おもわず「バンザイ、バンザイ。助かった」助かつた、「バンザイ」と叫んでしまうのでした。向こう側の村が氣の毒と思いつつも、自分たちの村が助かつたことを喜び合うのでした。いつしか、この堤防を「バンザイ堤防」と呼ぶようになりました。

昭和7、8年の大水害のときは、木詰から上流にかけて、7カ所も決壊し、このときが一番多くの「バンザイ」を叫んだと言います。

明治43年、道庁が夕張川の調査を開始し、保原技師が川の流れを分けて新しい水路を造る「分水路」案を提案します。

〈川の合流地点から江別までは直線距離で12kmの距離だが、実際の夕張川は、その3倍の40kmもあって、曲がりくねつて千歳川に流れ込んでいる。このため、夕張川を「クッタリ(地名)」のところで止めて、真っ直ぐに石狩川へ流すためには新しい川をつくらねばならない。〉という結論に達します。

大正11年に着工し難工事の末、昭和11年によく通水しました。これを見た人々は、

目に涙を浮かべて力強く、誰にもはばかることなく堂々と腹の底から「最後の『バンザイ』」を叫んだのでした。



夕張川の新水路 昭和11年(『悠久No.9』所収)

# 大学排水と大学橋

石狩川は江別市の東で千歳川と合流し、これより32km遡ると、長沼町舞鶴地先にいたり、ここに「大学排水」という名の水路と排水機場が千歳川に接しています。

今から50年以上も前、昭和16年7月、「学生義勇軍」が千歳川、長都沼の洪水氾濫を防ぐとともに、太平洋と日本海を結ぶ大運河構想を期して千歳川と長都沼の間に水路を掘りました。

一帯は湿原泥炭地で工事を阻み、過酷な労働と食料不足により怪我人や病人が続出しましたがこの困難を乗り越え、20日後の8月2日に500mを掘削します。

昭和23年、道庁直営で残り700mを掘削して長都沼まで開通しました。付近住民が学生の労苦に感謝し、大学排水と名付け、架けられた橋を大学橋としました。この地点は千歳川放水路の呑口にあたり太平洋までの距離は約40kmの地点です。

平成2年11月20日、ちょうど放水路の開口予定地点にあたる長沼町舞鶴大学橋の袂に、一基の史跡碑が建てられました。この

碑は、昭和16年夏、当時「徵兵猶予」の恩典を受けていた大学生が、それに代わって応えた、勤労奉仕のモニュメントです。

北海道へは千歳川治水工事の一環として、全国大半の大学・高等學校が参 加し、当時水害の要因



この学生の中には、その後の学徒出陣で命を落とした学生も少なくありません。その一人南方で戦死した刀禰館正弘中尉は、その遺稿で、この工事を終えて解散するに際し「今別れたなら又何時会えるか分からぬい、別れたくない、こう言い合つて、我々は交々肩を叩き、手を握り、ボロボロ涙を流して別れを惜しんだ」と、痛ましくも書き残して逝つたのでした。

になっていた長都沼の氾濫を抑え、あわせて掘削排水路(後に大学排水と命名)が、将来太平洋につなぐ水路になるという、大きな口マンに情熱をかきたてられて、激しい労働に

青春の汗を流したのです。碑の3面にわたって50余の校名と約270余名の学生の氏名が刻まれ、正面の碑には全国学生義勇軍排水掘削由緒碑建設期成会による「撰文」が感動をこめて刻んであります。

太平洋戦争勃発の直前、昭和16年7月14日午後、千歳線島松駅に下車した井上勝英氏を隊長とする全国学生義勇軍の一

行は、舞鶴橋を渡つて長沼町に入りました。果てしなく広がる低平地、馬追沼、長都沼一帯の湿原沼地には葦が密生し、いつたん豪雨に見舞われれば、たちまち浸水泥海と化します。義勇軍の青年たちは千歳川へ結ぶ1,200mの水路掘削工事のうち500mを20日間で完成させたのです。

この学生の中には、その後の学徒出陣で命を落とした学生も少なくありません。その一人南方で戦死した刀禰館正弘中尉は、その遺稿で、この工事を終えて解散するに際し「今別れたなら又何時会えるか分からぬい、別れたくない、こう言い合つて、我々は交々肩を叩き、手を握り、ボロボロ涙を流して別れを惜しんだ」と、痛ましくも書き残して逝つたのでした。

## オサラッペ川

夏に水害を受けていました。

広大な鷹栖の中央を貫流するオサラツベ川は、その源を鬼斗牛山脈の千歳山(チライネヌプリ)に発し、昇竜川、千歳川を合わせて

明治35年に松平農場が、続いて40年に近文土功組合が大きな水田用溝路を作ったことがオサラッペ川の氾濫を一層大きなものにしてしまいました。

チアイヌンベツ川となり、さらば雲居山から  
発するイブンペウシ川、千鳥ヶ丘を源とする  
シユマム川を合流し、その下流でヨンカシユッペ  
川、そのほかの数本の川を合わせて、近文台  
地の旭岡と嵐山の間を経て、大河石狩川に

延長25・7km、流域面積192km<sup>2</sup>、一帯は道内有数の米どころとなっています。

りました。着物を脱いで渡った川に1本の丸太橋が架けられ、やがてそれが土橋となり、毎年のように融雪洪水と集中豪雨に悩まされながら、入植者が奥地へ進むたびに一つ、また一つと橋が架けられてきました。

その昔、水害に苦しむ人たちが土功組合を組織して、多額の負担金を出し合い、原始のオサラッペ川を大改修しました。旧鷹栖村を流れるオサラッペ川は流域面積が広く、屈曲蛇行する乱流だったので、毎年のように春

今日の美田、鷹栖町の礎を築きあげた治水の偉業をたたえ、オサラッペ川とヨンカシユツベ川の合流点近くに「治水碑」が残されてい

その後、30数年を経過したオサラツペ川は、  
桶門管などの管理施設も老朽化して氾濫防  
止効果が十分ではなくなってきました。

さらに河川の維持管理も行き届かず、原  
始河川の様相さえ見  
せていました。



治水記念碑



嵐山から見るオサラッペ川

サラツペ川は氾濫して、冠水面積360ha、浸水家屋159戸という甚大な被害に見舞われます。

昭和49年、頻発する洪水による地域開発の遅れに悩み、下流から上流まで一貫した抜本的な河川改修が叫ばれ、「オサラツペ川改修促進期成会」が正式に発足しました。昭和50年に、大臣管理区間に認定されて治水事業の本格的な実施がはじまりました。

## 忠別川からの引水

「花のまち」として知られる東神楽町は、大雪山系の麓、石狩川の支流・忠別川に沿つて位置します。明治2年に北海道開拓使が置かれ、多くの調査団が上川地方に入りました。東神楽町の付近一帯を「上川離宮予定地」としましたが、結果的に設置されていません。

明治23年に上川地方初の神居、旭川、永山の3村が置かれ、上川原野の開発が進み、25年神楽村が誕生、27年に御料地の貸し下げが行われ、四国、広島、富山などから続々と入植し、開墾が始まりました。

しかしそこは原始林に覆われ、時には熊、集中豪雨、病魔と闘い、昼なお暗い鬱蒼とした大地を切り開いてきました。老樹・古木を伐採し、根とともに野焼きをし、わずかに開墾した畑地に麦類やトウモロコシ・大豆などを播くことから始めました。

この地は「赤色土壤及び細粉なる砂質土壤：水田農耕に適した天然的沃土なり」と言われ、隣村の3村で稻作が行われていたこともあり、畑作から稻作への転換が熱望さ

れました。

明治29年、雨粉産の赤毛種で試作をします。播種から栽培方法などすべて初めての試みのため、苦労したにもかかわらず、収穫された米の品質は劣悪で、香味も色沢もとても満足できるものではありませんでしたが、水田開発の貴重な試作経験となり、これが東神楽稻作の出発点となりました。

畑作は簡単な技術、収穫量の多さという利点があつたため水田稻作を試みる者もしばらくは現れなくなります。しかし畑地は連作による地力減退や気象条件により収穫が上がらず、稻作転換への意識革命が起こり始めます。

明治34年、数名が天然の小川と谷地を利用して再び試作を始めます。翌35年同志76名が私設の水利組合を組織、東御料地第一水利組合を発足させました。導水門や灌漑排水路を作り稻作をはじめたのですが、忠別川の氾濫や35年、36年と大凶作が続くと組合は解散、水田は畑地に、灌漑溝は埋没しました。しかし畑地の地力の衰えは著しく、生産減少・価格低迷など、稻作を熱望する声が高まっていきます。



東御料地土功組合忠別川導水門

明治36年に北海道土功組合法が制定されたのをきっかけに、明治41年東御料地土功組合が設立され、翌年から忠別川全域の改修・浚渫工事に着手、3年後に忠別川からの引水灌漑溝路延長約80km、300haの新田開発という大規模な工事が完成します。以来、畑作から稻作へ転換する人々が急増し、造田が進み、神楽村の水田耕作は、畑作經營の2・5倍もの利益を生むようになり、本格的に軌道に乗っていきます。

## 砂防事業の構想と経緯

砂防事業には国直轄と道営とがあり、国直轄は石狩川上流と忠別川・美瑛川の三河川が指定されています。石狩川上流及び忠別川はすでに着手され、美瑛川は昭和61年に着工し、ともに通常砂防として事業が行なわれています。忠別川が昭和54年に着工したのに併せて、美瑛川砂防事業の促進運動を展開し、通常砂防とともに十勝岳火山泥流対策の陳情も行いました。

56年、この泥流対策が北海道開発局で取り上げられ、美瑛川泥流対策検討委員会(後に美瑛川砂防基本計画検討委員会)が設置され、基本計画検討のうち、泥流対策の検討が開始されます。60年に美瑛川砂防基本構想がまとめられ、当初は十勝岳火山泥流と土石流対策・水系砂防の基本で検討を行い、曲折を経て構想が決定しました。その内容は、美沢26線を最下流基準点と定め、その上流の美瑛川流域を区域として、計画超過土砂量約250万m<sup>3</sup>、活火山対策基本土砂量約93万m<sup>3</sup>、合計343万m<sup>3</sup>の土砂生産・流出を抑制するものです。この全量を制御す

ることは現在の国の財政では不可能なため、尻無沢川、アバレ沢川の三支溪流の不安定土砂量分の泥流対策としました。

この構想をもとに、美瑛川を4区間、

その他の5支流区間に分けて、導流堤8本、

砂防ダム37基、床固工群約9千m<sup>3</sup>、遊砂池約415m<sup>3</sup>という全体施設計画で、事業費約150億円を見込み、このうち美瑛川と尻無沢川、アバレ沢川、硫黄川の一部を第1期施工計画として昭和61年に着工します。

昭和61年、世界的にも国内的にも火山活動が激化する傾向がみられ、活火山対策的重要性が認識され国土庁に活火山防災対策検討会が設置されます。十勝岳をモデルとした泥流災害対策の在り方を検討することになり、現地調査が開始されました。



十勝砂防（白金付近）

昭和62年、北海道開発局に旭川開発建設部を事務局とする十勝岳火山泥流対策検討委員会が設置され、火山泥流の浸食する流量を抑止するために、美瑛川には砂防ダム3基、床固工群等2基を設置し、土砂190万m<sup>3</sup>と融雪水390万m<sup>3</sup>を浸食防止工事・緑の砂防ゾーンと砂防ダムで処理をして、尻無川は流路工700m、砂防ダム3基、床固工群7基を設置し、土砂30万5千m<sup>3</sup>と水44万5千m<sup>3</sup>を処理します。硫黄沢川は砂防ダム17基、緑の砂防ゾーン、導流堤2,700mを設けるとともに、火山泥流監視システムの設置などが盛り込まれました。

十勝岳の火山活動が増加されるに伴つて、林野庁旭川営林支局も十勝岳火山泥流対策委員会を設置して、旭川市で第1回委員会を開催しました。美瑛町も噴火と泥流対策として、防災緊急避難図を全戸に配布し、非常用物資の確保を徹底しました。

63年12月19日、十勝岳が爆発し、泥流が発生しましたが被害は幸いにも出ませんでした。ただちに美瑛町は十勝岳火山噴火対策本部を設けて、以降24時間体制で警戒と各種対応を行っています。

## 主要河川の改修状況

中富良野町を流れる各河川は、すべて石狩川水系空知川の支流です。大正の中頃までは、原始河川のままの状態が続きます。

各河川は、灌漑用水を供給する源であると同時に排水の幹線でもありました。原始のままの河川の流木や両岸から倒れ込む大木を取り除く程度のことしか行われていませんでした。そのような原始河川から今日の姿になるまでには、先人の力によつて行われた数多くの治水工事があつたことを忘れてはなりません。

大正7年、富良野(排水)土功組合によつて特筆すべき大きな治水工事が行われました。その当時、尻無川だった現在のヌツカクシ富良野川とデボツナイ川を合わせ、「中央大排水」という人工の川を造り、富良野川下流に合流させて空知川に排水させる計画でした。

この事業は、当時の富良野原野において、とてもなく画期的な大事業でした。いまのような機械力はなにひとつない時代で、頼りになるものは人の力だけです。このため土工

夫はすべて本職が雇われました。この土工夫たちはタコと呼ばれ、飯場はタコ部屋と言わされました。とても過酷な労働条件を強いられた工事でしたが、大正8年9月26日に竣工します。

この大事業によつて、富良野原野の排水網は整備され、その後の用水路の設置や、もとは不毛の地とされた湿地帯の原野が水田として利用されたことからみても、治水といつよりまさに開拓という言葉がふさわしい大事業でした。

開拓の進展により、国土保全、洪水防護、人命・財産の保護という、治水と農業上の水利とが並行して推進されていきました。その後、河川改修の必要性が次第に要求され始めたころ、大正15年5月24日、十勝岳が大爆発しました。

十勝岳の爆発によつて泥流が、富良野川の上流から川の流域に沿つて富良野平野、上富良野市街、中富良野村はじめ、一帯の村や富良野川の各支流に流れ込みました。大木までもなぎ倒し、川は泥で埋まり、水位が刻々と増加していきます。泥流の被害を受けた住民は、さらに洪水の危険にまでさらされま

した。

この爆発が契機となり、昭和2年に災害復旧工事とともに、泥流による被害にあつた河川の部分的補修や屈曲の激しい箇所の切り替え工事が行われます。



十勝岳の噴火

## 源流のまちと金山ダム

南富良野町は石狩川水系空知川の最上流に位置します。明治24年、砂金採取者の入地から歴史がはじまり、およそ120年が経ちました。

大正11年8月の大水害は全道を襲いましたが、南富良野町も例外ではありません。交通網は断絶され、各集落は孤立する慘状に見舞われ、翌年にも空知川が氾濫しました。このことが契機となり、空知川上流域の治水のためのダム構築が計画されます。

道庁の測量の結果、地形的に鹿越地点が候補に挙げられます。この計画は治水のための洪水調節だけではなく、利水としての電源開発や灌漑用水の確保など多くの成果が期待できる多目的ダムです。しかしこの計画は経済的理由などから具体化されることはありませんでした。

戦時中にもこの計画が検討されたのですが、戦時下だけに鹿越の石灰石事業だけが重要視され、ダム計画は進展を見ないまま終戦を迎えます。

南富良野町の農業発展のためには是非と



金山ダム

そして昭和42年3月、着工から5年、総工費76億円をかけた金山ダムが完成します。このダムは洪水調節・下流水稻地帯への灌漑・滝川市への上水道・出力2万5千kWの電源開発という4つの目的があります。湛水式が始まりしばらくすると、総貯水容量1億5千m<sup>3</sup>という巨大な人造湖・かなやま湖が出現したのです。

南富良野町は最上流「源流のまち」としての意識と誇りを胸に、治水・利水・親水の理念を実践しています。かなやま湖には一切の排水は行わず、高い場所へも排水を汲み上げています。また幻の淡水魚「イトウ」の保護のための条例を作り来訪者や近隣に広く呼びかけています。上流域であることの特性を活かして、ラフティングやカヌー下り、フィッシングなどの環境づくりにも積極的に取り組んでいます。

昭和37年、念願のダム工事が着工されます。その間、昭和41年には湖底に沈む予定の鹿越小学校の廃校式が行われて、65年の歴史に幕を閉じました。他に農地520町歩と鹿越駅など民家、農家230戸が水没することになりました。